義太夫

義太夫協会会報
第４１号
昭和63年１月８日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6－18－2 新橋演舞場 B2
TEL　（541）5471

新年に際して

義太夫協会会長　田辺秀雄

明けましてお芽出度うございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

さて私が前会長からその職を頼まれてお引き受けしてから一年が経ちました。何分にも今までお付き合いのなかった多くのこの道の方々の間に入ったものですから、まず会員とこの社会を知ることが最初の仕事であったのですが、実際はその一年間に多くの難問や事件が起きてしまいました。それらは一部ではありますがいずれも若い世代の会員が引き起こした問題でした。勿論協会が丁度今新旧世代の交替の時期にあったことも原因の一つと考えられますが、それだけではないと思います。誤解や思い付き、付和雷動などまことに軽率な行動が人々を傷付けたり、何よりも会員の和にひびをいれたことは大変悲しい事です。

今の義太夫界は、保護されている文楽や歌舞伎舞踊などと共にあるものを除いた、純粋に語りで行く女義に関しては、他の邦楽とくらべてその勢力は微々たるものがあり、昔ほどとは行かなくとも他の邦楽同様に広く普及させねばならぬと、国も有識者も一生懸命に考えているような状態です。これを更に寂れさせるようなことがあっては、この芸能に生命をかけている多くの師匠や、愛好している後援者の方々に済まないだけでなく、貴重な日本の文化財を滅ぼすことになります。

このことは単に若い人達の問題だけではありません。この義太夫協会は義太夫節を守りその発展をはかる為に作られた会なのですから、会員の一致協力が必要なのです。私の知っているところでは、特に古曲会と日本琵琶楽協会などが流派や派閥をこえて大同団結し芸能の起死回生を計ったことを知っています。女義はかつてその全盛を誇った時代があり、しかも今でもそれを知っているお年寄りが居られるくらいですから、もっと盛んにならねばならない筈です。その為には会員の皆さんが手を取り合う必要があり、軽率な行動などは皆で押さえるべきです。

義太夫節は古典音楽であります。古典というものは永い間に種々洗練されてきた貴重な歴史を持っています。唯勝手に語れば良いというものではありません。技術そのものは個人差もありますが、筋さえよければ短時間で覚える人もいます。しかし芸となるとそうはいきません。芸を作り上げるには永い年月と経験、工夫などが必要なのです。そしてプロになるには舞台でのマナーなどがあります。

昔は芸事は六つの年に習い始めることになっていました。しかもその前から周囲にその環境もありました。そして幼い頃から師匠の芸を見聞し、行儀やマナーも教わったものです。特にプロとなるには内弟子としてその芸界のことも知らねばならなかったのです。だから二十才くらいでプロとしてもおかしくはなかったのです。

（次頁へ）

（前頁より）

しかし今は何も知らないで大学生くらいから面白そうだと入門するのですから芸を磨く時間が少ないのは当然かも知れませんが、それだけに技術を身に付けると共に、自分の師匠のみならず他の人の舞台もよく見、人一倍やらねばなりません。流行歌や演歌とはちがうのですから甘い考えではなりません。

芸は人格だと言います。師匠方も技術だけでなくそのことも教えて頂きたい。私は最初本牧亭で気になったのは掛け合いの時、自分の番が済んだ人がいきなり突っ立って楽屋に引っ込むのを見てびっくりしました。これは語っている人の邪魔にならぬよう静かにしなければならぬのですが、そっと頭を下げて礼をして下がるべきでしょう。そうしたことや、舞台での愛嬌など、師匠は弟子に心掛けて頂きたいものです。

私が若い世代にこういうことを敢えて言うのは、将来立派な語り手や三味線になってこの義太夫の灯を消さないようにして欲しいからです。私は吉田幸三郎さんというこの道の大先輩の晩年に親しくして頂いたのですが、その最後に伺った言葉は「私は後継者が無くなると思い若い人を甘やかして来ましたがそれを今では後悔しています。芸は厳しいものだということを知らさなければいけない。それを貴方にお願いして置きます」ということでした。

正月早々変なことを述べましたが、今年は協会と義太夫界にとって良い年であるように、また会員、後援者の皆様の御健康と御活躍を祈ります。

心身障害児のための第17回特別公演 収支決算報告

〈収入の部〉

会場募金箱(20・21日)	37,066円
当日入場料	18,000円
出演者扱切符代	98,900円
協会扱御寄附	219,000円

〈内訳〉

和田　博様	22,000円
池田　弘一様	20,000円
佐伯　勇様	20,000円
坂本　朝一様	20,000円
松尾　武市様	20,000円
松前　重義様	20,000円
佐野　俊三様	10,000円
竹本　朝重様	10,000円
竹本駒之助様	10,000円
中村初波奈様	10,000円
妣田　圭子様	10,000円
藤波　耕六様	10,000円
横山　敏雄様	10,000円
内野アキコ様	5,000円
加藤　清政様	5,000円
竹本扇太夫様	5,000円
中島　古平様	5,000円
渡辺　兼佐様	5,000円
小林トシ子様	2,000円

収入合計　372,966円

〈支出の部〉

心身障害児のための寄附金	150,000円
本牧亭席料他諸掛	85,000円
旅費交通費	42,650円
通信費	35,920円
床世話・荷上他	36,000円
弾き合せ会場費	18,600円
諸雑費	4,796円
支出合計	372,966円
差引残高	0円

第17回チャリティ公演に御協力下さいまして有難うございました。今回もプログラム・切符等の印刷一切は協会常任相談役の高野俊雄氏がおひきうけ下さいました。

新春懇親会御案内

＊1月29日(金) 6時より
＊蓬萊閣　三階和室(八三一)一七六三
　上野2－14－29(京成上野駅そば)
＊会費　五〇〇〇円

何か一品、景品をお持ち下さい。
何が当るかお楽しみ！

北京料理の卓を囲んで楽しい御歓談を――
お申込みは1月25日(月)までに事務局へ
会員以外の方もどうぞ。

邦楽はなぜわからない

相談役　竹内道敬

去る十一月二十一日、本牧亭で右の題でお話しをいたしましたが、そのときに話し足りなかったことなど、少し整理してみようと思いました。

まず、右のような題を考えついたわけから申し述べますと、私は今、大学で主として日本音楽史という授業をしております。極端なことをいうと、なにしろ、生れてからこのかた、ピアノしか弾いたことがなく、またピアノしか聞いたことがないという学生を相手にするのですから、これはたいへんです。こういう学生に、日本音楽の面白さを説明し、少しでも興味を持ってもらおうというのが、私のねらいなのです。

歴史をしゃべり、歌詞を配り、語句の説明をし、曲のききどころを話し、テープをきかせます。ここまではどなたもお考えになる方法でしょう。しかし、これだけでは駄目なのです。

それはともかく、まず歌詞を配るときに困ったのは、表記法がじつにまちまちなことです。旧かなづかいと新かなづかいとが一緒くたです。また、ひとつの字を違う読み方でならべて使っています。「例えば例を出す」のような使い方です。また「中」と書いて「うち」と読ませたり、あてなくてもいいむつかしい漢字をあてていたり、めちゃくちゃなのです。レコードの歌詞カードがとくにひどいようです。これでは、素直に入っていけません。

義太夫でいうと、苦言を呈すれば、義太夫協会発行の本もそうです。それに、どこまでがだれのセリフなのか、今いっているセリフはだれのなのか、少なくとも、あれを見ただけではわかりません。わかるのは、通人だけです。何回もきいて知っている人だけです。知っている人には、あの本は必要がありません。知らない人のためには、もっとわかりやすい本でなくてはなりますまい。旧かなづかいでなくては、義太夫節の気分が出ないという方は、御自分の趣味としてはけっこうですが、それを初心者に押しつけるのは、やめていただきたい。むかしの丸本の通りに活字にするのは、これは研究者のすることです。それだってむかしの丸本の作者が、すべて国文学者ではありませんから、当て字や嘘字を使っています。それを読まされては、いいかげんいやになります。まず、歌詞を今の表記にあらため、わかりやすい本を作ることからはじめるべきでしょう。

このような本が発行されているのは、実は私たち日本人が、言葉、つまり日本語で死ぬような思いをしてこなかったからです。たとえばこのあいだの戦争で、日本は負けましたが、敗戦とはいわず、今でも八月十五日は終戦記念日です。しかも、その日から、違う言葉をしゃべらなければならない、などということはありませんでした。国境のある国ではこんなことはしょっちゅうだったそうです。

フランスの作家ドーデの小説に『最後の授業』というのがあります。これはアルサス地方のフランス語が、プロシアに占領されたために、使用禁止になるという物語です。ある朝小学校に遅刻して行くと、先生がいつものように大きな声でどならない。それどころかやさしく席につきなさいといいます。そして今日かぎりでフランス語の授業はおしまいで先生も学校を去らなければならないと話しだすというものです。自分が今まで使っていた言葉が、奪われそうになる悲しさ、そしてそれを死んでも守ろうとする気持が、みごとに描かれています。

日本ではそんなことはありませんでした。明治維新のあとで、日本語はやめて、すべてを英語にしようといった人がいたくらいで、日本語がいかに大切なものか、自覚なしに使ってきたのです。多くの日本人にとって、日本語は空気のようなもので、努力せずに手に入るものなのです。私たちは、日本人だから日本語を使うという自覚もなく、ただ日本語しかないので使っているだけなのです。そのような態度では、いつまでたっても、正しい日本語は生れてこないし、正しい表記法も定着してこないでしょう。

（以下次号）

（国立音楽大学客員教授）

素と玄のいろいろのお噺し

相談役　豊澤猿三郎

新年お目出度うございます。私の大患いもお蔭様で全快致しました。大角力に因んで旦那角力のお話を書きましょう。

明治の終り向島に小野組という土木建築があって、親分は与五郎という、若いがなかなか頭が切れる評判のよい親分でした。滅法角力が強くて、本所・深川・浅草の三区合同の大関でした。三組の師匠は荒岩関で、毎年正月と八月に合同大角力が行われます。場所は与五郎の家の庭で立派な四本柱の立った本式の土俵です。当日は番附の順で取り進み、最後は大関同士で相撲。無論ずば抜けて強い与五郎が勝ちます。その後、親分と荒岩の御祝儀角力があります。しかも百両という莫大な懸賞が付いています。二番迄は一対一ですが、いつも荒岩関が歩が悪く、勇み足か寄り切りで、残念ながら勝てません。相口が悪いのでしょう。懸賞金は来年迄お預けです。荒岩関は口惜しそうに連れて来た弟子、序二段のふんどしかつぎに汗を拭かせ、席について大宴会になるのです。宴中荒岩は与五郎さんとの笑い話に、「今年は懸賞金を戴いて部屋を直そうと思いましたが来年に延びました。来年は必ず戴いて部屋の普請じゃ。アハ、、、、」等と冗談で席はお開きとなり、荒岩関は三区の旦那衆から多大の御祝儀に預り、二人引きの人力車で帰ります。ふんどしさんは後片付けなど手伝って帰ります。

時過ぎて夏の相撲になりました。当日は三区の旦那相撲が集って土俵を清め、荒岩関の来るのを待ちました。ところへ先日のふんどしさんが手紙を持って来ました。巡業の都合で今日は行けぬ、明後日は必ず参りますとの手紙でした。一同に相談した結果、せっかく土俵も清めた事ゆえ、ふんどしさんを相手に皆で遊びましょと、褌を締めて一同土俵へ向かいましたところがいけません。旦那相撲さん、ふんどしさんにコロ〳〵投げられまして最後の一番になりました。この案を持ち出した与五郎さんも土俵へ上りました。仕切って立ち上りましたら与五郎親分の姿は無い。土俵の外で転がっていました。その場は一同笑って散会しました。明後日に荒岩関は例のふんどしさんを供に連れて参りました。旦那相撲さんも十何人か列席していました。では始めましょうと荒岩関が縁側の障子を開けて、アッと息を呑みました。土俵が無い。与五郎親分が後ろから声をかけて、「関取、私はおとつい限り相撲は止めたよ。」「何故ですか？」「弱かった。投げられたよ。」「誰にです？」「後ろにいるお弟子さんに。」「エッ、こいつが親分を投げたんですか、この馬鹿野郎。」とばかり横っ面をひとパンチ。永年荒岩が与五郎さんに負けて来た訳を知らずに、仕込まれた通り相撲に勝って撲られたお弟子さんも可愛想でした。

その日も笑い話で宴を終わり、辞退する荒岩に百両の金を渡し、その後も親分は部屋の後援に当りました。そして与五郎親分は義太夫の稽古を熱心になされるようになり、大正十一年の第一回の五十義会に伊藤松鶴の名で初回の大関となりました。流石相撲で鍛えた体をもって八十余歳迄立派な義太夫で終わられました。

次に終戦前兜会の大喜利で、近江清華氏の弁天小僧、寺岡三幸氏の南郷、荒木泉氏の日本駄右衛門、米沢春楽氏の番頭で浜松屋を演る事になりました。肩衣も豪華で、友禅縮緬で引き抜くと刺青模様、大道具大仕掛です。ところが番頭の春楽氏が役不足で、急病と言って来られない。サア番頭がいなけりゃ始まらない。困り果てているところへ扇賀太夫が通りかゝりました。扇賀は義太夫界一の下手ですが、仕方が無い。彼で我慢しようと、早速弾き合わせも無く開けました。御承知の店前のセリフがあり、店へ入り南郷が注文を出すと番頭が承って小僧に、「何の棚の何々を急いでここへ持って来いよ――。」「ヘーイ。」この一声で聴衆にドーッと受けて後は弁天も南郷も聞かれません。扇賀太夫の番頭一人が受けて終わりました。清華氏も三幸氏も、こ

んな筈でなかったと色々研究しましたが、やっぱり番頭が受けるので、三度ばかり舞台へ掛けましたが、その豪華な肩衣も浜松屋もお蔵入りでした。これとは逆の話で三十年程前、中州の文化会館で、逆艪の掛合で松鶴氏の権四郎、隅斗氏の松右衛門で、お筆を名は忘れましたが協会のある太夫さんが語りましたが、これは完全に松鶴、隅斗の両氏に喰われ、気の毒に思いました。

素と玄の違いもいろいろで、大正の初めから申せば素義のお方で、ある一段が特にずば抜けてお語りになった物があります。敬称を略させて頂きます。和島和玉の沓掛村、寺島鱗の明烏、仁科和声の御殿、藤田和昇の鰻谷、谷口三響の重の井子別れ、松尾武市（先代）のどんぶりこ、加藤二楽の岡崎、星野桔梗の沼津、鈴木一朝の鮓屋、右は物故順で。鱗、一朝、両氏の他は私弟かして戴きました。玄に勝るとも劣らぬ皆様御立派な芸でございました。お話が永くなりました。御退屈様で。

お見舞

義太夫節保存会会長・義太夫協会前副会長豊澤仙廣師の自宅改築工事がこの秋に完了、メゾン新小松という五階建のマンションに生れかわりました。東邦大学大橋病院に入院中だった仙廣師は、完成を待って退院、神宮の森を見下ろす新居で静養中です。

（新住所は8頁上段を御参照下さい）

神田外語大に太棹ひびく

昨年四月に新設された神田外語大学の第一回学園祭に、同大学理事・義太夫協会相談役の池田弘一氏が義太夫節演奏の場を設けて下さいました。外国語を学ぶ学生にこそ日本の古典芸能をと、十一月十五日に実施されたものです。しかも、演目の選定からリハーサル、懇切丁寧な解説書作製、そして当日の説明・進行まで全てを一手に引き受けての大奔走で、出演者はそのバイタリティーに圧倒されるほどでした。この企画を教師のための義太夫講習会で再現できないだろうかと話しつつ帰途についたことでした。

（床は教壇、後ろに見えるのは黒板です）

出演して

竹本素丸

「学園祭」と言って各種模擬店を連想するのは、食い気第一の貧しい発想。本来もっとアカデミックなものの筈。生演奏による太棹の音色を聞かせるのを目的とし、三味線の表現方法を池田先生が丁寧な解説を交えて教えようという催しがあった。私たちが出演した学校は、広いキャンパスにペイントの匂いも残るピカピカの建物。会場は、二五〇人収容できるという階段式の教室。教壇に敷かれた毛氈にちょこなんと座り、いつもと勝手が違い見下ろされながらの演奏が始まった。会場を埋め尽くす（とは言えないのが残念）のは、半分位が学生か？　違いを比較して聞かせるという試みなのに、片方だけで出て行ってしまう等心残りのこともあったが、大方は熱心に聞いてもらえたと思う。途中池田先生が得意のノドをご披露するなどの盛り上がりを見せ無事終了した。外国語大学というので気になったが、まだ義太夫は外国語ではないようで、ひとまず安心というところでしょうか。

第三回豊澤仙廣賞 芸団協助成新人奨励賞 六十二年度 受賞者内定

昨年末、12月24日の理事会にて、62年度豊澤仙廣賞に竹本越若、62年度芸団協助成新人奨励賞に竹本越恵・豊澤多美子が内定しました。3月の本牧公演席上にて披露の予定です。

（後日詳報）

協会の動き

昭和62年9月より昭和63年1月まで

9月20日　義太夫協会公演会　於本牧亭
9月21日　教師のための義太夫講習会　講師　景山正隆他　放本牧亭
21日　第9期竹本研修適性審査　於国立劇場
9月27日　女流後継者育成事業　鷺娘・蝶の道行研修（野澤喜左衛門師指導）　於国立劇場稽古場
27日　柏すども劇場「八王子車人形の世界」　於我孫子文化会館
9月28日　公演部会　於芸団協会議室
28日　理事会　竹本土佐恵、理事および役職を辞任　於芸団協会議室
28日　第3回運営特別委員会　於芸団協会議室
9月28・29・30日　女流後継者育成事業　草履打研修（豊竹呂大夫師指導）於国立劇場稽古場
9月30日　昭和62年度民間芸術等振興費補助金（青少年等芸術普及事業）交付申請書提出
10月4日　祖先祭　読経・墓参のあと懇親会
新入正会員・竹本佳之助の披露を行う　於両国回向院
4日　川口おやこ劇場「八王子車人形の世界」　於川口市民会館
10月10日　資料・記録部会　於事務局
10月14日　女流後継者育成事業　鷺娘・蝶の道行研修（野澤喜左衛門師指導）　於豊島区民センター
10月15日　同右　於浅草公会堂
10月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
10月24日　昭和62年度芸術祭協賛・国立劇場邦楽鑑賞会「女流義太夫の会」竹本土佐廣他が出演　於国立小劇場
10月31日　テープ鑑賞会（資料・記録部主催）　於国立第二演芸研修室
11月3日　竹本越道常務理事（重要無形文化財総合指定保持者）勲五等瑞宝章　鶴澤重輝理事（重要無形文化財総合指定保持者）勲五等瑞宝章
11月5日　公演部会　於芸団協会議室
11月14日　62年度文化財保存事業東京都補助金交付申請書提出（保存会）
11月20日　義太夫協会公演会　八王子車人形参加　於本牧亭
11月21日　教師のための義太夫講習会（文化庁助成）3頁参照　於本牧亭
21日　資料・記録部会　於事務局
11月26日　東京都文化財保存事業費補助金交付決定通知（保存会）
11月28日　芸団協第16回邦楽実演家団体連絡会議　於芸団協会議室
11月30日　第4回運営特別委員会　於芸団協会議室
12月7・8日　仙台子ども劇場「八王子車人形の世界」　於仙台市民会館
12月11日　公益法人会計基準講習会　於東京都職員研修所
12月12日　いずみおやこ劇場「八王子車人形の世界」　於堺市立栂文化会館
12月14・15日　女流後継者育成事業　草履打研修（豊竹呂大夫師指導）　於国立劇場稽古場
12月14・15・16日　女流後継者育成事業　裏門研修（野澤喜左衛門師指導）於国立劇場稽古場
12月14日　公演部会　於芸団協会議室
12月15日　邦楽連合会番組編成会議　於芸団協会議室
12月16日　昭和62年度民間芸術等振興費補助金（青少年等芸術普及事業）交付決定通知　16日　足立子ども劇場「八王子車人形の世界」　於足立文化会館
12月20日　第17回心身障害児のための特別公演（NHK厚生文化事業団共催）2頁参照　於本牧亭
12月21日　昭和62年お名残公演　前日と二日にわたり「仮名手本忠臣蔵」を演奏した。　於本牧亭
昭和63年1月7日　公演部会　於事務局
1月8日　義太夫協会会報41号発行

おめでとうございます
―受賞あいつぐ―

❁竹本　越道師
永年協会役員として運営に尽力、国立劇場養成講師を勤め若手を育てあげた竹本越道常務理事が62年11月、勲五等瑞宝章を受賞。

❁鶴澤　重輝師
三味線一筋、近年の本牧亭他での顕著な活躍、後進の指導に尽力している鶴澤重輝理事が62年11月、勲五等瑞宝章を受賞。

❁鶴澤　寛八師
東京でも本牧公演他で活躍の鶴澤寛八理事が、本居地大阪で、62年11月25日大阪市民表彰（文化功労）を受く。

❁西川　古柳師
東京都無形文化財・八王子車人形の西川古柳師が、東京都文化功労章を受賞。

本牧亭の石井秀子氏
義太夫協会顧問に就任

戦後の義太夫協会の歴史は本牧亭ぬきには語れません。昭和25年以来、女流義太夫公演を見守り応援して下さっている石井秀子氏が義太夫協会の顧問に就任。去る9月28日、石井秀子氏の喜寿を祝う会の席上（於東京会館）快よくおひきうけ下さいました。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

'88都民芸術フェスティバル
第18回邦楽演奏会

＊昭和63年3月6日（日）
＊第一生命ホール
＊東京都助成による特別料金一、五〇〇円

邦楽連合会（義太夫・清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲）主催の年一回の邦楽演奏会。義太夫は左の通りです。

昼の部〃壺坂観音霊験記　壺坂寺の段〃
沢市―竹本土佐廣　お里―竹本綾之助
観音―竹本土佐恵　三味線―鶴澤重輝
ツレ弾―鶴澤悠美

夜の部〃増補大江山　戻り橋の段〃
若菜実は鬼女―竹本駒之助
渡辺綱―竹本朝重　三味線―鶴澤寛八
八雲―鶴澤寛輔　（後日詳報）

女流義太夫本牧公演後援会その後

会報40号にて女流義太夫本牧公演後援会の発足を御報告した処、次の方々から御芳志を頂戴いたしました。有難うございました。

佐々木明郎様　一〇〇、〇〇〇円
竹本駒之助御連中様有志　四〇、〇〇〇円
（8月末日までとの総計　一一〇、〇〇〇円）
松井一男様　二〇、〇〇〇円
渡辺兼佐様　二〇、〇〇〇円
（8月末日までとの総計　五〇、〇〇〇円）
早川勉様　一〇、〇〇〇円
昭和62年12月末日現在
合計　九二〇、〇〇〇円

協会の電話がキャッチホン
＜わりこみ電話＞になりました

電話が話し中で御迷惑をおかけすることが多いので、このたびキャッチホン（わりこみ電話）に切りかえました。

例えば義太夫協会AがBさんと話し中にCさんから電話がかかった場合。Bさんに一寸待って頂いて、Cさんと話をして、その後Bさんと話を続けられるというのがキャッチホンのしくみです。Aには、わりこみがあるとサインの音が聞こえます。Bさんには、プッという音がして一瞬電話が切れたようになることがありますので、慣れた方だとわりこみのあったことが判ります。Cさんには、自分がわりこんでいるかどうかは判りません。AとBさんの話し中にCさんがわりこんでも従来の話し中の音がしないのです。普通の呼び出し音しか聞こえません、ここが難点です。AがBさんに「一寸待って」といえない場合など、Cさんが「留守だ」と思ってしまう危険があるのです。つまり、電話をかけてすぐにつながらなくても、留守とは限らず、話し中ということもあり得るのです。

私共も不慣れで、わりこみのあったことを言い出せなかったり、あわててしまったり、何かと失礼があることと存じます。早くキャッチホンを上手に使いこなせるように努めたいと思いますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

新入会員御紹介

[redacted]

住所等変更

[redacted]

〈改　名〉

✿竹本土佐菊は、師匠の了解のもとに土佐廣一門を離れ、竹本京子と改名

✿竹本朝代は、竹本越道の預りとなり、竹本満（みつる）と改名

✿野澤錦鈴は、竹本駒之助門人、鶴澤悠美（ゆみ）と改名

〈御寄附〉昭和62年4月以降

竹本　越道師　五〇〇、〇〇〇円

河野　国声氏　二〇〇、〇〇〇円

（第3回豊澤仙廣賞副賞として、ならびに日常活動に対する寄附金として）

堀　田鶴子氏（故鶴澤重造師夫人）　一〇〇、〇〇〇円

和田　博氏　三〇、〇〇〇円

松橋　正文氏　五、〇〇〇円

高橋　山月氏　一、〇〇〇円

尚、昭和61年度に於て、芸団協芸能功労賞受賞に際し、竹本綾之助師より一〇〇、〇〇〇円御寄附頂きました。御報告がおくれ、申し訳ありませんでした。

義太夫教室ＯＢ会

＊昭和63年1月31日（日）12時～6時

＊上野広小路　本牧亭

例年になく受講者の多い第40期生は、初の舞台を前に緊張しています。1期生～40期生までが出演します。（入場無料）

〈寄　贈〉

平田　智恵氏　写真　一葉

豊澤猿三郎氏　柝　一組

伊藤　丸文氏　義太夫床本　十九冊

義太夫稽古本　十八冊

小唄等稽古本　十二冊

女義盛観物語他　七冊

太　棹　一挺

細棹（バチ共）　一挺

ヤッコバチ　一挺

三味線立て　一ケ

高野　俊雄氏　仮名手本忠臣蔵プログラム　一式

切符等印刷

訃　報

■星合信義氏（賛助会員）　62年2月2日逝去

■小此木桃子氏（賛助会員）62年　逝去

■渡井玉声氏（賛助会員）62年9月29日逝去

御冥福を心よりお祈り申し上げます。

〈訂　正〉

40号（昭和62年9月24日発行）7頁下段義太夫節三百年基金募金御報告のうち、現在額は、四〇一九、八三九円でした。おわびして訂正いたします。

編集後記

新年おめでとうございます。お正月に読んで頂くはずの会報をお正月に校正しています。確か何年か前の後記にも同じことを書いた記憶がございます。相変わらず忙しさに追われる年明けですが、この忙しさが確実に花咲き実を結ぶよう、今年は本当に良い年であって欲しいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。